

## ベルリン東洋美術館所蔵『熙代勝覧』にみられる出版文化とその分析

松田 泰代

### はじめに

『熙代勝覧』は、紙本着色一巻、大きさ四三・七×一二三二・二cm、ベルリン東洋美術館所蔵の絵巻物である。タイトルは、佐野東洲（文化十一年（二八一四）没）によつて揮毫された巻頭題字「熙代勝覧」から採られている。絵巻物に描かれている場所は、日本橋通りの今川橋から日本橋までの西側を俯瞰する構図で描かれている。この絵巻物には、出版業と販売業を同時に営んでいた当時の本屋三軒が住所情報を含めて描かれている。それは、本銀町二丁目の須原屋善五郎、本町二丁目北の出雲寺和泉（掾）、室町二丁目の須原屋市兵衛である。

この絵巻の成立年代は、文化年間（一八〇四―一八一八）といわれている。それは東洲が巻頭題字を書いていると判断できること、画中に「回向院、文化二」と書かれた勸進箱が見られることから、文化二年から文化十一年に制作されたと推定できるからである。また、描かれている内容の年代は、およそ文化二年ごろといわれている。それは文化三年三月の丙寅の火事（通称牛町大火）の記録により、描かれている場所はことごとく焼失したと推測されることから、文化二年ごろと考えられている。この論文では、描かれている出版業者（本屋）の様態および出版文化の情報を整理し、『熙代勝覧』に描かれている店舗の建物種類と丙寅の火事後の出版物に見られる店舗情報を照合することにより、火災における土蔵およ

び土蔵造りの店舗の有効性について考察をおこなう。

すでに拙稿「江戸における新刊本販売点数の推移に関する考察」<sup>(1)</sup>で、『熙代勝覧』に描かれている三軒の本屋の新刊本取扱い点数の推移、および須原屋一統の同推移をみることで丙寅の火事が出版業界に与えた打撃について考察をおこない、江戸における大規模資本を持つ書肆による版權という資本の集中化と火事の影響により中堅の没落と第二次新興書肆の勃興という現象が起こったのではないかと結論づけたので、この論文では丙寅の火事が出版業界に与えた考察は割愛する。

次に、描かれている本屋軒先の広告札に書き込まれている書籍名と本屋の関係について論じ、『熙代勝覧』の成立に関する考察を行う。

## 1 『熙代勝覧』の位置づけ

日本橋は江戸を発する五街道の起点で交通の要であった。日本橋を中心とするこの地域は、江戸最大の繁華街であった。『熙代勝覧』に描かれている通りは、日光・奥州道へと続き、また江戸城大手前へ通じる本町通りとも

交わり、市中からの江戸城への経路のひとつであった。まさに、江戸の都市機能をなう中心部の一角が描かれている。

この絵巻物は俯瞰した構図で描かれていることにより、地図や絵図では表現が難しい三次元の都市情報を入手できる。絵巻物には、およそ七町(約七六四メートル)、大通りに面した店舗約九十軒、登場人物一六七一人、犬二十匹、馬十三頭、牛四頭、猿一匹、鷹二羽、そして富士山が描かれている<sup>(2)</sup>。また、店舗の看板や暖簾、旗などの文字情報が克明に描き込んである。それゆえに、この絵巻物は歴史的な史料としての側面も持つ。

### (1) 『熙代勝覧』の再発見の経緯

ハンス・ヨアヒム・キュステル氏と妻インゲさんが親戚の家の屋根裏部屋で発見し、彼らはベルリン東洋美術館へ寄託した<sup>(3)</sup>。当時は、中国の絵巻物と考えられ、美術館の収蔵庫で保管されたままであった。そして、一九九五年にキュステル氏が亡くなり、彼の寄託品が遺産継承問題により浮上した<sup>(4)</sup>。日本美術の学芸員カアン・トリン

さんにより、日本美術と鑑定され、その内容は文化二年の日本橋通り今川橋から日本橋までを描いたものと認定された。<sup>5)</sup>

## (2) 『熙代勝覧』の巻頭題字と題簽

この絵巻物は全長一・二三二・二cmであり、見返し約四八cm、巻頭題字の書の部分約二・二六cm、絵の部分一〇五五cmで構成されている。

書の部分約には、墨書「熙代勝覧」、関防印「英傑之余事／天章之急務」(朱文長方印)、「左潤之印」(白文方印)、「東洲」(朱文方印)がある。このことにより、佐野東洲の書と判断された。浅野秀剛によると「熙代勝覧」とは、輝ける太平の世のすぐれた景観の意味であり、ロバート・キャンベルによると「英傑之余事／天章之急務」は、国家の大事にたずさわる英傑でさえ、その余暇にたしなむべきことで、まして文教を明らかにする上では急務である、という意味とのこと<sup>6)</sup>である。小林忠は、関防印より書家の署名がないことについて、興味深い考察<sup>7)</sup>をしている。署名落款のない絵の筆者について、浅野は勝川春

英の可能性を示唆しながらも、最終的な判断は慎重に保留している。<sup>8)</sup>小林も結論は急がず保留している。<sup>9)</sup>題簽には「熙代勝覧 天」とある。「天」と巻表記がなされていることより、ほかに「地」、もしくは「地」「人」が存在していたと推測される。<sup>10)</sup>

## 2 『熙代勝覧』にみられる

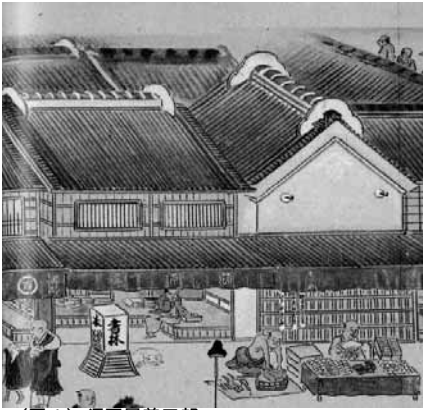
### 出版業および出版文化情報

『熙代勝覧』には、出版業と販売業を同時に営んでいた当時の本屋が三軒描かれている。本銀町二丁目須原屋善五郎、本町二丁目北に出雲寺和泉(掾)、室町二丁目須原屋市兵衛が住所情報を含めて描かれている。

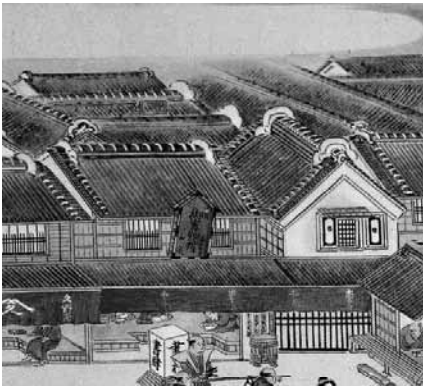
『熙代勝覧』の情報は、写真のごとく正確に記録されているのかどうかは実証できないが、そこから紡ぎ出される情報は江戸の社会や文化の表層部分を伝えていると考えられる。また、店の並びといった位置情報、看板がったえる屋号情報などは正確であると考えても差し支えないと判断する。なぜならば、第一の理由として、伊藤毅は、絵図寸法と地図寸法の値を一近傍値に変換して分析をし

た。その結果、得られた数値は「描かれた各町家の間口構成とよく符合するし、少なくとも「町家を省略して描いていない」ことを示している」<sup>(11)</sup>と述べている。第二の理由として、わかることは克明に記録するが、わからないことは描かないという絵師の姿勢が読み取れるからである。屋号が書かれてない店も散見する。

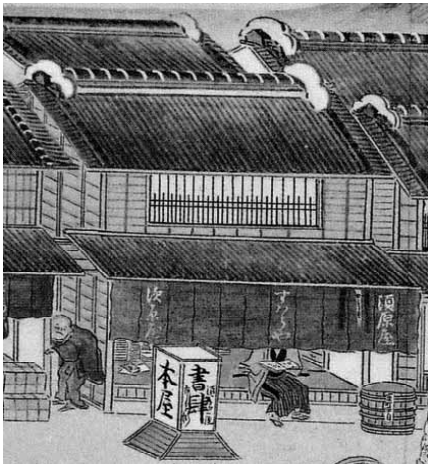
人物情報は、よりリアルな表現を行なうために加えられたと考える。ゆえに当時の人々が見ても違和感を持たない、共感しうる表現がなされており、そこには世間が認知している店の格や当時の都市の雰囲気を与えている



(図1) 須原屋善五郎



(図2) 出雲寺和泉(掾)



(図3) 須原屋市兵衛

と考える。したがって、特に店舗に描き込まれた人物像からは、その店の客層が読み取れると考える。

三軒の本屋、須原屋善五郎(図1)、出雲寺和泉(掾)(図2)、須原屋市兵衛(図3)の『熙代勝覧』に描かれている情報を文字情報にまとめたのが、(表1)『熙代勝覧』にみられる出版業者の「様態」である。<sup>(12)</sup>

### (1) 所在地情報

『熙代勝覧』に市兵衛の店舗が描かれていることによ

＜表1＞ 『熙代勝覧』にみられる出版業者の様態

	須原屋善五郎	出雲寺和泉(掾)	須原屋市兵衛
住 所	本銀町二丁目	本町二丁目北	室町二丁目
建 物	瓦／土蔵造／2階 瓦／木造／2階 (奥に瓦／土蔵造／2階)	瓦／土蔵造／2階 瓦／木造／2階 (奥に瓦／木造？／2階)	瓦／木造／2階 (奥に瓦／土蔵造／2階)
水引暖簾	「須原屋・すはらや」 「須原屋」	「出雲寺・和泉」	「須原屋・すはらや・須原屋」
箱看板	「書林・本・須原屋／善五郎」	「書林・書肆」	「書肆／須原屋／市兵衛・本屋」
御真向看板		「御用／御書物所／出雲寺／和泉」	
広告札	「徂徠先生文集」 「はいかひ明題集」 「江戸砂統編」	「江戸大繪」 「諸國名所」 「道中記」 「太平武盛」	「御絵そうし」 「狂歌集」 「南郭先生詩文集」
人物	成人男性1人(客、町人 羽織)	成人男性1人 未成年男性1人(店の者?顔白し)	成人男性1人(客、武士 羽織／袴／脇差し)

り、文化二年ごろ、室町二丁目で営業していたということがわかる。このことは、市兵衛の出版物である『解体新書』の刷の前後関係を決定する、重要な位置情報となる。

## (2) 店構えの情報

今田洋三は、『江戸の本屋さん』で市兵衛の店構えについて、次のように表現している。「安永三年(一七七四)春のある日、杉田玄白が、日本橋室町二丁目の申椒堂須原屋と看板をあげている土蔵造りの本屋にはいった。玄白は、ふる敷づつみを大事そうにかかえている<sup>(13)</sup>。この記述は、室町二丁目で営業していた市兵衛の店舗は「看板をあげている」「土蔵造り」であったという情報を伝える。

室町二丁目で営業していた市兵衛の店構えが「土蔵造りの本屋」という知識が何処から出てくるのか。当時の一般的な本屋の店構えとして表現しているのか、どこかにそのような具体的な記述、すなわち文章や絵が存在するのか、疑問に感じていた。

しかし、『熙代勝覧』に描かれている室町二丁目にあつ

た市兵衛の店舗は、看板をあげていないし、通りに面した店は土蔵造りではなかった。

このことにより、今田は「看板をあげている」「土蔵造り」といった本屋を参考にこの記述をおこなった可能性が考えられる。

### ・看板

看板に関しては、『熙代勝覧』を通覧してわかるように、看板をさげる店は沢山あっても、看板をあげている店は数少ないということである。『熙代勝覧』に描かれている上げ看板のある店舗は、たった三軒である。三井越後屋ですら、「看板柱」と「屋根看板」だけで、看板をさげている。

看板をあげている出雲寺和泉(掾)は、幕府の御用を扱った「書物師」、すなわち「御用達町人」の身分を保持していた。<sup>(14)</sup>しかし、画中を観察する限り、「御用達町人でないと看板があげられない」ということはないようである。他の二軒、葉種問屋の小西林兵衛と同じく葉種問屋の俵屋・森野氏には、御用達町人の情報が描かれていない。「御用達町人でないと看板があげられない」という規

制があつたならば、絵師はどこかにその事をきちんと描いているのではないかと考えるからである。

伊藤毅によると、『熙代勝覧』には「看板柱」「屋根看板」「御真向看板」「下げ看板」「置看板」の種類が記録されており、一般の商家が「御真向看板」をあげるには、寺社の許可が必要とのことである。<sup>(15)</sup>ちなみに、屋根看板と御真向看板の相違は、前者は道路に対して垂直にしつらえてさげてあり、後者は出雲寺和泉(掾)で見られるように、道路と平行にしつらえて、あげている点である。

三軒の本屋は、置看板を持っていたという共通点が見いだされる。一般的な本屋の特徴を表していると考ええる。そして、看板をあげるという行為は、店の格や経済力が必要、だったと考えられる。

### ・建物

この絵巻物が、店の造りを正確に表現しているかは現段階では実証できないが、「土蔵造りでない本屋もあり、木造の店構えの場合もある」「店の隣に土蔵を持っている場合もある」ということが見いだせる。

火事対策の一つとして土蔵があつた。板木のような経

営資産を保持する商売や大店は、土蔵および土蔵造りの店構えを持つていたと考えられる。土蔵を本格的に造ると費用がかさむので、一般の商家では穴蔵を利用したといわれている。<sup>(16)</sup> 穴蔵の評価は坪当たり土蔵の五分の一ほどであったという。<sup>(17)</sup> いったん火事が起こると、土蔵に目塗りをし、穴蔵に砂蓋をして被災を防いだ。いくら土蔵を持つていても、火災時に的確に処置を行わなければ、火は防げない。

しかし、土蔵を持つていたか、木造だけだったかの違いは、火災の際に明暗を分けたと考えられる。このことは、『熙代勝覧』の研究データ<sup>(18)</sup>が顕著に示す。

東京大学伊藤毅研究室（大村繁和・室健）は、『熙代勝覧』に記載されている建物全部の正面図を作成し、それに通し番号をつけた。

一方で、文化六年十一月『江戸十組諸問屋』、文化十年五月『江戸十組問屋便覧』、文政七（一八二四）年二月『江戸買物独案内』に記載がある店舗をマークしたデータが『大江戸日本橋絵巻』に載せられている。

前者の通し番号をもとに、絵から読み取れる建物の情報と、後者のデータを（表2）「建物の種類と丙寅の火事

後の記録物収録状況」にまとめてみた。絵から読み取れる建物の情報というのは、建物の壁から木の壁かそうでないか、建物二階部分の窓の構造や屋根との繋がり、線、および木の柱が表に現れているかなどにより、土蔵、土蔵造りの店舗か塗屋か木造の店舗かという判断を行なった。空白になっているのは、木造の店舗である。塗屋とは、木造の壁に漆喰を塗り土蔵造りに見せかけた建物である。この表により、建物の種類と文化三年の大火以後に同じ土地で営業を続けていた店の関係がわかる。

店構えが木造の店は、文化三年三月の丙寅の火事後の記録に再現する確立が低い。もつとも、たとえ店構えが木造であっても他の場所に土蔵を所有している場合もある。また、史料に記載される店の種類というものも考慮しなければならない。例えば、『江戸十組諸問屋』には飲食店等の記録はされていない<sup>(19)</sup>。しかし、それらのデータを除外して比較しても、圧倒的に土蔵造りの店舗を構えていた店のほうが、存続率が高いことがわかる。

土蔵が持つてるといことは、相対的に財力があるというところで、たとえ被災しても余力があり、被災後も持ちこたえられたともいえる。逆に土蔵および土蔵造りの店

<表2>建物の種類と「丙寅の火事」後の記録物収録状況

	建物の種類	A	B	C	商いの種類	屋号	備考
1					瀬戸物問屋		
2					水飴屋	長井小右衛門	
3	土蔵造り				瀬戸物問屋		
4	土蔵造り				瀬戸物問屋		
5					桐油合羽問屋	山田屋平左衛門	
6	土蔵				書物問屋	須原屋善五郎	
7							
8				○	仏師	万屋半兵衛	
9					汁粉屋・雑煮屋	藤屋	
10					指物屋		
11					不明		
12					仕出屋		
13				○	京系物木綿太物問屋 蠟燭問屋 御入歯所・菓種問屋	大坂屋 大隅屋[甚兵衛] [松井]	
14	土蔵造り	○	○	○	呉服問屋・小間物諸色問屋	唐木屋[七兵衛]	
15					印判所		
16	塗屋				紙問屋?	加賀屋	かすかに柱の表現あり
17					紅問屋・小間物屋	津金	
18					筥・雪駄問屋	丸屋	
19		○	○		墨筆硯問屋	高島屋与助	
20				○	鮎屋	玉鮎・(翁屋)庄兵衛	
21					白粉問屋	三文字屋	
22					鏡師	津田薩摩(掾)・定治	
23	塗屋		○	○	煙草問屋	太田屋[権右衛門]	
24					袈裟衣問屋	和泉屋	
25							
26	土蔵				絹袖木綿問屋	井ます上総屋	
27	土蔵	○	○	○	地蔵紙御問屋	丸屋彦兵衛	
28							
29					筥・雪駄問屋	伊勢屋	
30					菓種問屋	保童圓	
31					(空家)		
32	土蔵造り			○	京系物問屋	藤屋利兵衛	
33					雛人形屋	万屋	
34					雛人形屋	大黒屋	
35					二人蕎麦餛飩屋	三河屋	
36	塗屋				帳面問屋	梶屋[新三郎]	屋根と壁面の繋がり方
37	塗屋				菓種問屋	藤木	
38					お茶漬け屋 不明	朝日屋	
39	土蔵				書物問屋	出雲寺和泉(掾)	
40							
41					糸物問屋?	久野屋[善助?]	
42	土蔵造り		○	○	呉服問屋・白粉問屋	近江屋茂助	甚兵衛
43					菓種問屋	小西林兵衛	
44					居酒屋		
45	土蔵造り						
46	蔵(木造)	○	○	○	紅白粉問屋・御伽羅之油問屋	玉屋善太郎	
47	土蔵造り	○	○	○	呉服・小間物・袋物問屋	丸角屋治郎兵衛	
48					煙管問屋	中村屋源八	
49	土蔵造り				仏具問屋	万屋市兵衛	
50					桐油合羽問屋	二文字屋	
51					菓種問屋・小間物問屋?	萬屋	
52					菓種問屋	俵屋・森野氏	
53	土蔵造り				仏具問屋	万屋市太郎	



	建物の種類	A	B	C	商いの種類	屋号	備考
54					薬種問屋・煙管問屋	大黒屋吉左衛門	
55					薬種問屋	福島屋	
56					薬種問屋・白粉・陣笠問屋	鎰屋	
57		○	○	○	帳面問屋	大坂屋市右衛門	
58		○			薬種問屋・[漆器?]	越後屋	
59	土蔵造り	○	○		糸物問屋	万屋次郎八	
60					算盤問屋	さしま屋	
61					呉服物所・両替店		
62	(土蔵)	○	○	○	京糸物問屋・袈裟問屋	越後屋八郎兵衛	
63					墨筆硯問屋	中村屋忠兵衛	
64					上絵師		
65					書物問屋	須原屋市兵衛	
66					小道具問屋	長嶋屋	
67					小道具問屋		
68	土蔵造り	○	○	○	下り雪駄・下り傘・小間物	河内屋[長兵衛]	
69					小道具問屋	木屋[伊助]	
70					小道具問屋・棕櫚箒?	木屋	
71		○	○	○	算盤・小間物問屋	木屋[市兵衛]	
72	建設中	○	○	○		木屋幸七	
73					八百屋		
74					蒲鉾屋		
75	土蔵造り	○	○	○	下り雪駄・下り傘・小間物	嶋屋[半兵衛]	
76		○	○		薬種問屋・[漆器?]	西村屋孫兵衛	
77	土蔵造り				小道具問屋 小間物問屋	松田 高嶋屋	屋根と壁面の繋がり方
78					小道具問屋	伊勢屋	
79					菓子屋	常陸屋	
80	土蔵造り	○	○	○	漆器問屋?	伊勢屋[利助?]	
81	土蔵造り				味噌問屋	太田屋	
82					八百屋		
83					紙問屋	越前屋	
84					小道具問屋	伊勢屋	
85	塗屋				結納品問屋	万屋	
86	土蔵造り	○	○	○	小道具問屋	日光屋[七郎兵衛]	
87					八百屋		
88	塗屋				酒問屋	亀田屋	
89	塗屋				八百屋・乾物屋	叶屋	

A 文化六年(1809)十一月 『江戸十組諸問屋』

B 文化十年(1813)五月 『江戸十組問屋便覧』

C 文政七年(1824)二月 『江戸買物独案内』

### 3 広告札から検討した

#### 『熙代勝覧』成立に関する考察

本屋の店頭に掲げられている広告札について検討する。三軒の本屋、三軒とも

舗をもつということは、被災のダメージを軽減するための対処方法の一つであったことがわかる。そして、被災後も同じ地域で営業が可能だったといえよう。

三軒の本屋で、市兵衛だけが店に隣接して土蔵を持っていなかった。このことは、市兵衛の被災によるダメージが大きかったのではないかと考える。また、日本橋に近い方から、市兵衛、和泉(掾)、善五郎と並んでいることにより、防災の対処をする時間が比較的多く持てたのは、善五郎だったのではないだろうか。これらのことは、市兵衛の衰退を考える上での重要な示唆を与えてくれる。<sup>20)</sup>

に店頭に広告札が描かれているので、当時の一般的な本屋の特徴をあらわしている<sup>(21)</sup>と推測できる。描かれている約九十軒の店舗と比較しても、このような広告札は、本屋にしかなく、非常に近い形態の広告があるのは菓屋である。

広告札は本屋の特徴、すなわち扱う商品「本」の特性ゆえに成立し、商品を伝えるという機能を持つが、逆に、広告札がその本屋が扱う商品の傾向を我々に伝えてくれる。

### (1) 須原屋善五郎の広告札

善五郎の店先には、「徂徠先生文集」「はいかひ明題集」「江戸砂続編」の広告札が見える。

「徂徠先生文集」について割印帳にあたってみると、徂徠先生から始まる『徂徠先生天狗説』『徂徠先生答問書』、文集から探すと『徂徠文集』が確認できる。国書総目録で調べると『徂徠先生文集』二十一巻一冊（文政元年刊）と『徂徠先生文集解』二巻二冊（文化五年の序がついた刊本）を見つけることができる。絵巻物の描かれた時代

を文化二年と設定するならば、享保二十年（一七三五）刊（割印日元文二年）に富士屋弥三右衛門、大和屋孫兵衛から刊行された六冊ものの『徂徠文集』の広告と考えられる。

「はいかひ明題集」は市兵衛が刊行した『誹諧明題集』が考えられる。吸露庵こと建部綾足の作で、宝暦十三年（一七六三）に『古今誹諧明題集』全一冊、明和元年（一七六四）に『誹諧明題集』全四冊を刊行している。市兵衛は、営業初期、綾足（寒葉斎、涼岱、吸露庵）の作品をいくつか刊行している。綾足の日記や書簡を読んでみると、市兵衛との関係性が少しが見えてくる。綾足の作品は、絵も含め、市兵衛の初期の看板商品だったはずである。なぜ、市兵衛の店舗ではないのだろうか。

「江戸砂続編」は『続江戸砂子』五冊、享保二十年刊（割印享保十九年）に万屋清兵衛から刊行された菊岡沾涼の地誌と考えられる。ほかに、万屋清兵衛刊行の『新撰江戸砂子』六冊、享保十七年刊や、藤木久一刊行の『再板江戸砂子』全八冊、明和八年刊（割印安永元年）などが存在する。<sup>(22)</sup>「江戸砂子」がついた狂歌の本などパロディ本もいくつが存在するが、これらの出版年代は文化後

半以降である。非常に近い時代の物では、文化元年に『江戸砂子娘敵討』という山東京伝・北尾重政の黄表紙本の存在も国書総目録では確認できる。断定はできないが、本の種類などから考慮して、享保二十年刊の『続江戸砂子』と考えるのが素直な解釈かと考える。

いずれにせよ三点とも善五郎の刊行本ではない。割印帳によると、善五郎は天明七年（一七八七）から活動がみられる。割印帳の記録範囲では、一二二点の本を扱い版元として刊行したのは九二点あることがわかる。<sup>(23)</sup>文化二年以前の自家出版の累計は五一冊であり、文化二年以降は四一冊である。善五郎が寛政年間に出版物の多くを刊行しているにもかかわらず、広告札にそれらの本が一冊も載せられず、活動期以前に別の本屋によつて刊行された本が記載されているという特徴がうかがえる。<sup>(24)</sup>絵師による須原屋善五郎が扱っている分野に対する知識、つまり印象が反映したものと考えられる。

## (2) 出雲寺和泉(掾)の広告札

「江戸大繪」「諸國名所」「道中記」「太平武鑑」のうち

の「諸國名所」「道中記」は一般的な単語なので具体的な本を同定できない。

「江戸大繪」は『江戸大繪図』であろうか。割印帳では明和八年に須原屋茂兵衛の版元売り出しで刊行されているものが見つかるが、文化十四年「江戸絵図株帳」でも同名の地図を数種類確認できる。この記録では、茂兵衛が和泉(掾)から版權を購入(買株)した江戸大繪図が確認できる。江戸絵図専用の株帳(版權台帳)が作られ権利関係が整理されるほど、絵図は売れ筋の商品であった。

また、「武鑑」も売れ筋の商品であった。和泉(掾)と茂兵衛の「武鑑」版權争いは有名で、書物師の立場から和泉(掾)が常に有利な形で収束したとの見解もある<sup>(25)</sup>が、文化十一年には茂兵衛が「武鑑」争いで勝つ。<sup>(26)</sup>『太平武鑑』は茂兵衛の出版物であり、『大成武鑑』が和泉(掾)の刊行物である。

絵師は、正確な和泉(掾)の刊行物を知らなくても、娯楽本や実用書を扱っている本屋という印象を持っていたといえる。そして、「大成」と「太平」を取り違えているも、的確に「江戸の地図」「名所・旅行本」「名簿」とい

う特徴を捕らまえていたといえる。

### (3) 須原屋市兵衛の広告札

「御絵そうし」「狂哥集」「南郭先生詩文集」のうち、「御絵そうし」「狂哥集」は一般的な単語なので、やはり具体的な本を同定できない。しかし、市兵衛は誹諧・歌などで活動を開始した本屋であり、『絵本世津乃時』（俳諧絵本、安永三年刊）、『絵本いろは歌』（天明八年刊）、『絵本貝尽』（天明三刊）などが市兵衛の蔵版目録や割印帳などで確認できる。他に『絵本大江山』（天明八年刊）、『絵本義経記』（安永二年刊、天明六年版）、『絵本曾我物語』（中京大図蔵本）は、奥付に市兵衛の名が載せられている刊本が存在する。

「南郭先生詩文集」という書名は確認できないが、須原屋小林新兵衛刊行の『南郭文集』『南郭絶句集』が確認できる。市兵衛が扱っていた『龍門先生文集』の印象とかぶさって、服部南郭の本が描かれたのだろうか。もしくは、服部南郭の本を読むような読者層を顧客として持っている本屋という印象を、絵師が持っていたからかも

しれない。

現代の我々が市兵衛の出版物として思い浮かべる代表的な書籍、例えば『物類品臈』『解体新書』『紅毛雑話』『三國通覧図説』等と、当時の絵師がリアルに表現するための小道具として使った本にこれほど違いがあるという、重要な示唆を与えてくれる。我々のイメージはどこから受容したものかを検討し、市兵衛の実像を新たに考える必要を感じる。

三軒の本屋の広告札を検討した結果、写実ではなく、絵師がイメージするそれぞれの本屋らしさを表現するために描いた書名だと考える。すなわち、当時の人がそれぞれの本屋をどのように受け止めていたのか、片鱗がうかがえる史料と考える。また、描かれている広告札の内容は、文化二年という時代より少し古いという特徴も見られる。

### むすびにかえて

絵巻物はとくに最後の場面が重要である。富士山を背

景に日本橋の真中でを馬に乗っている人物の意味するとは何なのか、たった一カ所、絵師によって絵に残された年代の記号が意味することは何なのか。関防印「英傑之余事／天章之急務」は何を語っているのか。

一般的に人は繁栄の頂点がいづなのか、事象の最中にいる時はわからない。衰退したときに、初めて振り返って頂点が判るものである。本屋と広告札にかかっている本との関係の不整合、年代のずれから、文化三年の大火あとに制作された可能性もあり得るのではないかと考える。あの輝ける時代（文化二年）を記録しておくために依頼が出され、急務で作成された可能性を示したい。この大火に対する幕府の危機管理は多大なものであった。危機管理政策を推進した人物、もしくは政治の中枢に近い人物の個人的な依頼で制作された可能性もあるのではないかと考える。

この結論は、絵師の落款も書家の書名もないことへの小林の考察「幕閣に近い大名、旗本ら高貴な武家が注文したのものかもしれない」を補強する材料を提供した<sup>(27)</sup>と考える。

## 【注】

- (1) 拙稿「江戸における新刊本販売点数の推移に関する考察」『書物・出版と社会変容』 第二号、二〇〇七
- (2) 小澤弘、小林忠著『熙代勝覧』の日本橋（小学館、二〇〇六）
- (3) 同掲
- (4) 同掲
- (5) 同掲
- (6) 浅野秀剛、吉田伸之編『大江戸日本橋絵巻』（講談社、二〇〇三）
- (7) 小林忠『熙代勝覧』絵巻について（前掲書『熙代勝覧』の日本橋）
- (8) 浅野秀剛「制作年代・構成・注文主・絵師」（前掲書『大江戸日本橋絵巻』）
- (9) 前掲 小林忠『熙代勝覧』絵巻について
- (10) 同掲
- (11) 伊藤毅「描かれた町屋」（前掲書『大江戸日本橋絵巻』）
- (12) 強調されている文字は、『熙代勝覧』の日本橋からの引用である
- (13) 安永三年市兵衛は「室町三丁目」で営業していた。（参照 拙稿 修士論文『解体新書』の書誌学的研究―二つの刊記情報をめぐる考察―）

- (14) 藤實久美子「紅葉山文庫の管理と書物師出雲寺家」(同著『近世書籍文化論』吉川弘文館、二〇〇六)
- (15) 伊藤毅「描かれた町屋」(前掲書『大江戸日本橋絵巻』)
- (16) 小沢詠美子著『災害都市江戸と地下室』 歴史ライブラリー三三(吉川弘文館、一九九九)
- (17) 同掲
- (18) 前掲 『大江戸日本橋絵巻』
- (19) 十組問屋を構成する問屋組合…紙店組(紙・蠟燭) 内店組(太物・練綿・絹布・小間物・雛人形) 通町組(小間物・太物・荒物・塗物・打物) 塗物店組 葉種店組 表店組(畳表・青筵) 釘店組(釘・鉄・銅物類) 綿店組 川岸組(水油・練綿) 酒店組
- (20) 井上宗雄「ほか」編著『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九三)、弥古光長著『江戸出版史』書誌書目シリーズ二六、未刊史料による日本出版文化史四(ゆまに書房、一九八九)、今田洋三著『江戸の本屋さん』NHKブックス(NHK出版、一九七七)などでは、「寛政四年(一七九二)、林子平処罰事件に連座し、『三国通覧図説』は絶版とされ、また重過料に処せられた。これを機に市兵衛の家運は衰えた」と言われているが、家運が衰えた原因は、文化三年の火事と跡継ぎの問題ではないかと考えている。なぜならば、割印帳に記載されてい

- る新版の自家出版数を検討してみると、重過料の罰金を支払わなければならなかった直近は自家出版数も激減しているが、その後、回復を見せていること、過去帳の調査の結果より、重過料が果たして、家運が傾くほどの値だったのかという疑義を感じているからである。
- (21) 本屋の店先に広告札が下げられている構図は、葛飾北斎が描いた葛屋重三郎の絵などでも確認できる。
- (22) 橋口侯之介により『江戸砂子』の出版経緯に関する詳しい研究がなされている。同著『和本入門』(平凡社、二〇〇五)
- (23) 今田洋三「江戸の出版資本」(『江戸町人の研究』三巻 吉川弘文館、一九七四)に収録されているデータによる。坂本宗子編『享保以降板元別書籍目録』(清文堂出版、一九八二)のデータでは、一三三三点/七七七点である。
- (24) 絵師について考える補助材料とならないかと考える。
- (25) 藤實久美子「株仲間の公認と武鑑出版」(同著『武鑑出版と近世社会』東洋書林、一九九九)
- (26) 彌吉光長著『江戸時代の出版と人』 彌吉光長著作集第3巻(日外アソシエーツ、一九八〇)
- (27) 田中優子は、「日本橋の店主たちによって作られた可能性が高い」という見解を示められている。同著『江戸を歩く』 集英社新書 〇〇一V(集英社、二〇〇五)

【付記】

この論文は、17th Annual Conference of EARJS (at Università Ca' Foscari di Venezia, 2006. 9. 29) および日本出版学会二〇〇七年秋季研究発表会（大阪市立大学文化交流センター 二〇〇七年十一月二十四日）にて、発表した内容をもとに、加筆したものである。